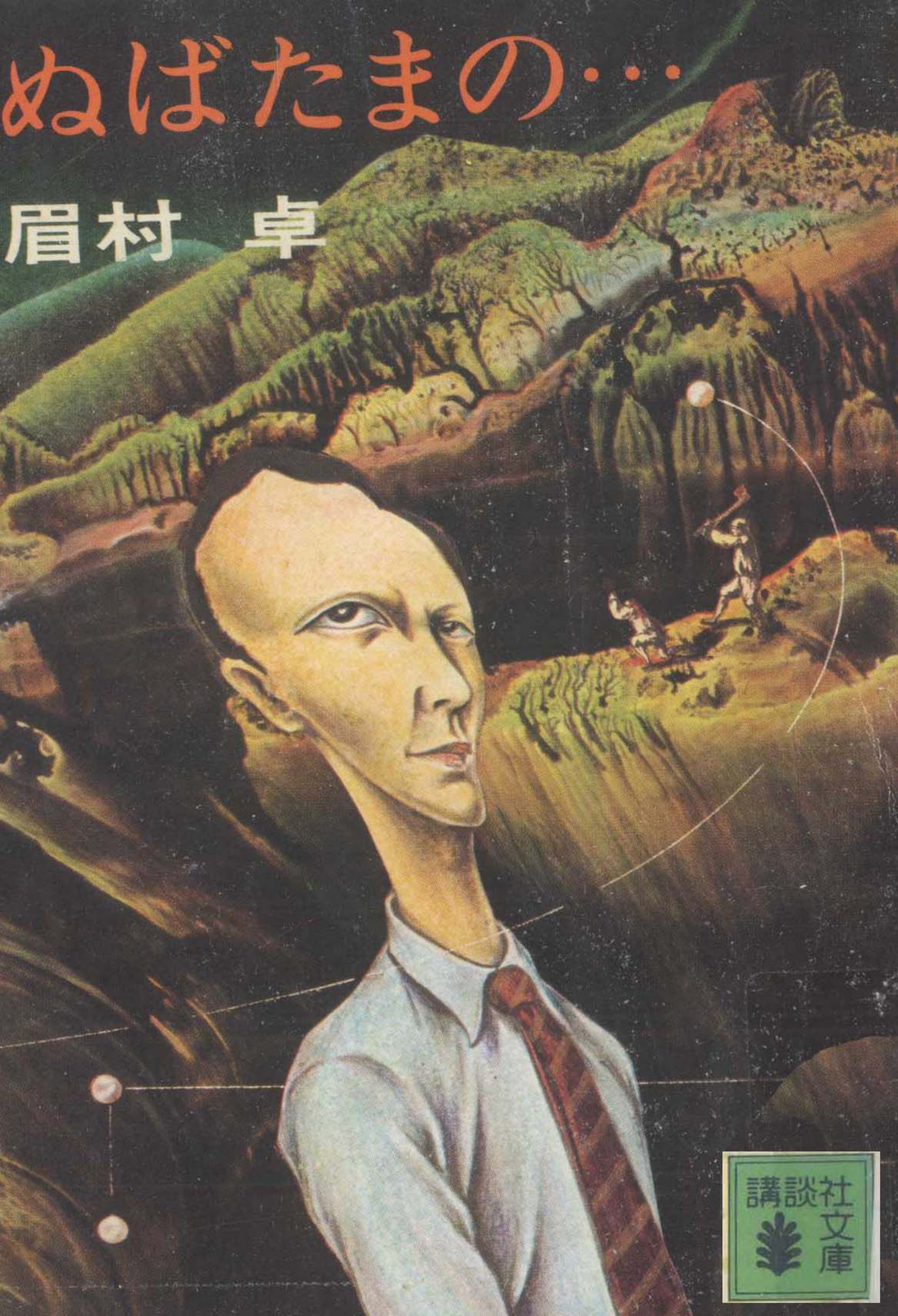
ぬばたまの…

眉村　卓



講談社文庫

講談社文庫

ぬばたまの…
眉村 卓

昭和55年7月15日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京 (03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　加藤製本株式会社

© Taku Mayumura 1980

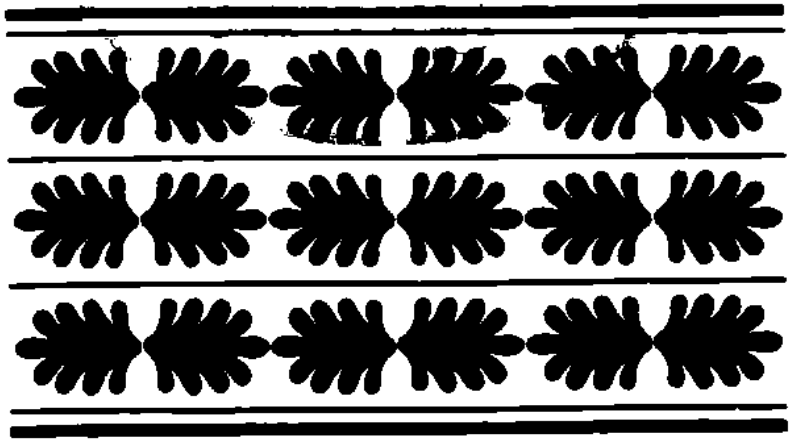
Printed in Japan

0193-361682-2253 (0)　400円
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

ぬばたまの…

眉村 卓



講談社

目次

ぬばたまの…　七
解説　山本　明　三一〇
年譜　三一六

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ぬばたまの…

1

ぽん、と、肩を叩かれたので、ぼくはびっくりして、振り返った。
「やあやあ。こら奇遇やなあ」
相手は叫び、おまけに、ぼくの手を握りしめ、振りまわした。
相手というのは、ぼくが以前に勤めていた会社の、上役だった安岡さん——安岡功氏である。
安岡さんのうしろには、奥さんらしい人と、それから、まだ小学生か幼稚園児ぐらいの兄妹が立っていた。
「これはこれは」
応じながら、ぼくは内心、がっくり来ていた。
ウィークディの、私鉄が経営する遊園地である。
東京へ来て、ホテルに閉じこもり、原稿用紙をにらんでいたものの、何も出てこないものだから、こうしてこんなところへやって来たのだ。そして、一時間もここでぼんやりしていたおかげで、どうやらやる気になったばかりだというのに……。
書きだしだって、できていた。
こんなのだ。

一枚の落ち葉が、だいぶ離れたところをまっすぐに降って来たかと思うと、くるりと向きを変え、横すべりして、足もとの陽溜りにころがった。ころがってみると、その葉は、うずくまった蛙みたいで、いやに大きかった……。

いや、書きだしなんか、もう、どうでもいい。それどころか、意欲もすっかりなくなってしまった。こともあろうに、安岡さんに会ったのである。安岡さんは、決して悪い人ではない。親切で、面倒見がよく、サラリーマンとしても、なかなか有能な人物なのだ。が……この人は、何もかもを、金銭と、軍隊の階級に置き直す癖があった。社員時代に、ぼくの文章がはじめて活字になったとき、安岡さんが最初に発した言葉は、

「きみ、それで、なんぼ貰えるんや？」

で、あり、第二の質問が、

「その雑誌、雑誌の業界でいうたら、どのくらいにあたるんや？　佐官クラスか？　尉官クラスか？」

で、あった。

とにかく、ぼくは、安岡さんと話していると、いつもカンが狂ってしまうのである。その当人に出くわすとは――。

「こんなとこで会うとは思わんかったで」

安岡さんはいい、奥さんに説明した。「ほら、これが、うちの社をやめて、小説、ＳＦちゅうん

かな、あれを書いとる浦上くんや」
「はじめまして」
細おもての奥さんは、つつましやかにお辞儀をした。きっと、PTAか何かで、しょっちゅうやっていて、馴れているんだろう。あたりさわりのない、型どおりの会釈だった。
「それにしても、あんた、ようかせいでるんと違うか？　ええと、ペンネームは何というたかな？」
安岡さんは、大声でたずねる。
「前浦拓」
ぼくは、小さく答えた。
「え？」
「マエウラ・タク」
「ああ、そやそや。そんな、ちょっと変った名前やったな。いや、わしら、小説なんて、滅多に読まんもんやから」
「そんなもの、あまり無理して読む必要ないですよ」
「いやいや」
安岡さんは、まだぼくを離す気はないらしく、あたり構わぬ声で続けるのだ。「あんた、そんなこというてたら、あかんで。わしの見たところ、あんたはまあ曹長クラスやけど、これから少尉になり中尉になるためには、もっと努力して、自分でも宣伝せんとあかん。な、そやろ？　奈保子」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ええ」
安岡夫人は、当りさわりのない微笑を浮べた。
「で……きょうは？」
何とかして逃げ出そうと、ぼくは、とりあえず話題を変えにかかった。「わざわざ東京まで……家族サービスですか？」
安岡さんは、肩をすくめた。
「うん。ま……うまいことウィークディに年休が取れたもんやから」
「パパぁ」
長話に退屈した安岡二世が、父親の服を引っぱった。
「ね、パパ……あそこの、オバケ屋敷に行くゥ」
妹も叫んだ。
「よっしゃ、よっしゃ」
ひきずられながら、安岡さんは、ぼくを手招きした。「どや。あんたも入らへんか？　ここのオバケ屋敷、ちょっとしたもんやと、東京支社の奴がいうとったんや。あんたも初めてやろ？行こや」
「いや、ぼくは……」
「何いうてんねん。ま、ええやないか」
安岡さんは、ぼくの手をつかんだ。
「……」

馬鹿馬鹿しかったが、ぼくは、安岡一家につづくことにした。どうせホテルに戻っても書けそうもないし……。

オバケ屋敷といっても、昔、子供のころに見たものとは、だいぶ違っていた。大きな建物の正面に、少しずつ間隔を置いて続くトロッコみたいなのがあり、それがレールに乗って自動的に建物の中のトンネルに入ってゆくのである。

「定員は四人らしいわ。ほなら、わしらは先に行くさかい」

切符を一枚、ぼくに押しつけると、安岡さんは、奥さんや子供と一緒に乗り込んだ。その車がトンネルに吸われて行くと、今度はぼくの番だった。

四人がけの小さいシートに、ひとりですわる。

トロッコが動きだした。

トンネルにすべり込んだとき、ぼくはまだ安岡さんのことを考えていた。久しぶりに会った以前の部下をオバケ屋敷に誘うなんて……きっと奥さんのほうは迷惑に思っているに違いないのだが……安岡さん自身は、そんなことを考えもしないのだろうか？　そういえば、安岡さんは、おやといいたくなるほど無神経なところがあった。そのせいで、作らなくてもいい敵を、だいぶ作っているはずである。

と。

ぼくは、ぎくりとして、前方をみつめた。自分の目が、見えなくなったのではないかと思ったからである。

まっくらだった。
正に、漆黒の闇なのだ。
ぼくは手をあげて、それがかすかにでも見えるかどうか、やってみた。
何も見えない。
こんな暗さを経験するのは、はじめてだった。ぼくは戦時中の、灯火管制時の夜をおぼえているが、あのときにはまだ、空というものがあった。
それが、ここでは全くの闇なのである。
よく出来たオバケ屋敷だ――と、ぼくはおのれにいいきかせた。オバケ屋敷もこのぐらいになると、たしかに効果があるだろう。そう考えようとしたが、どういうわけか、奇妙な不安が、あとからあとから湧いてくるのだった。
ガタン、と音がし、ぼくはあわてて前にあった金属棒らしいのをつかんだ。
トロッコが、カーブしたのだ。
正面に、首吊りを模した人形が浮びあがっていた。その下を通り過ぎる瞬間、人形の着物の裾が、ぼくの首筋を撫でた。
馬鹿な！　子供じゃあるまいし……ぼくは自分の恐怖をまぎらわせようと、笑い声をあげた。
いや、あげたつもりだったのだが、そうならなかった。ぼくの声の代りに、変な音が高くなったり、低くなったりしている。
お経だ。
読経の声なのだ。

それが、どこかは見えないが、スピーカーから流れているのである。
いつの間にか右側に、お濠の風景があらわれていた。暗いあかりを浴びて、身投げをしようとしている女の姿があった。女は人形とは思えぬ身のこなしで、膝をかがめて石を拾い、袂に入れかけて――じろり、と、こちらに顔を向けた。
また闇になる。
今度は、斬首の場面だった。うしろ手にくくられた父と子がすわっている。その背後から、武士がゆるゆると刀を振りあげているのだ。刀がひらめいたと思ったとき、何も見えなくなり、悲鳴と、何か重いものが落ちたようなひびきがした。
ぼくのてのひらは、じっとりと濡れて来た。
たくさんだ。
もうたくさんだ。
こんな悪趣味な……いや、ただの悪趣味なら、まだいい。グロテスクな化物がぞろぞろと出て来るのなら、見世物ですむ。だが、このオバケ屋敷はそうではなかった。ずっと昔の、人々が貧困のどん底にあり、しいたげられていたあの時代の日本を、再現しようとしているのだ。打首やさらし首が日常茶飯事であり、百姓一揆や飢饉がしょっちゅうあったあのころの――。
飢饉。
ぼくは、闇の中で目を据えた。
行く手に、ぼろぼろの百姓家があらわれたのだ。屋根が崩れ、障子がやぶれた廃屋。その中に、陰惨な照明を受けて、汚れたふとんと、細い足……。

餓死者なのだ。

ぼくを乗せた車は、念入りにも、その廃屋のまわりをめぐって行く。そして、予想したとおり、その餓死者はゆっくりと起きあがって来て、ドクロに似た形相で、うめき声をあげた。

「とうとう、米食えずに死んじまったァ」

ぼくはもうそれ以上、見つづける気がしなくなった。小さい子供なら、かえってキャアキャアとこわがるだけで、おしまいになるだろう。しかし、これは過去の、実在した世界なのだ。その悲哀と悲惨さを幾分でも感じることができるだけに、どうにもやり切れないのだった。

ぼくは目を閉じ、泣き声や訴えの声に耐えながら、ひたすら金属棒を握りつづけていた。早く終ってくれ。こんな見世物はもう結構だ。一刻も早く、もとの、晩秋の遊園地に出たかった。

車の動揺がとまった。

終ったのかな？

ぼくは、目をひらいた。

しかしながら、あたりは依然として闇である。

ぞくっとしたものが背中を走り――それからぼくは、急におかしくなった。ここは、オバケ屋敷なのだ。見世物小屋の中なのだ。今の今までおびえていたが、所詮は、現代のものなので、すべてが、合理的に説明できるはずなのである。

合理的な説明というと、つまり、車を動かしている機械の故障か、それとも、もっと単純な、そう、停電か何かであろう。

停電なんだ。

そういえば、たしか、このトロッコに乗ったとき、中で何があっても絶対に車から降りないで下さい、という掲示が出ていたっけ。と、いうことは、ときたま、こんな事態がおこっているか、おこる可能性があるのを意味する。

停電だ。

だから、待てばいいのだ。

ぼくは暗黒の中で、じっとすわっていた。

じきに、元に戻るだろう。

2

それにしても、本当に暗い。暗いというより、墨汁につかっているような気がする。

ふと、ぼくは、小泉八雲の怪談にある〝むじな〟の話を思い出した。あのころの月のない夜というのは、きっとこれくらい暗かったのに違いない。ぼくらは真の闇というものを知らない生活をしているから、なかなかピンとこないが、昔は人間は、しばしばこういう夜を体験したのだろう。いや、これが普通だったのかも知れない。だからこそ、妖怪の条件として、あかりもないのに着物の柄がはっきりと見える——などということを考え出したのだ。こんな暗闇では、どんな想像でもできるわけである。

その、もっと極端な例が、王朝の時代のもののけという奴だ。SFを書いている関係上、ぼくはよく時間旅行の話を読んだり、自分でも書いたりするが、そこでもっとも陳腐なアイデアとし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com